

1. 社会的アイデンティティ(social identity) [正解] a.

[解説] 社会的アイデンティティは自己の所属性に関する自己概念であり、特定の集団への所属を意識したときに、その集団（内集団）と自己の同一視を特徴とする。そのため、社会的アイデンティティが成立する場面では自己高揚動機の適用される範囲が内集団に拡張され、内集団を高く評価したり有利な行動を選択したりする「内集団ひいき」が生じる。逆に外集団は低く評価され、外集団差別（集団間差別）が発生する。

2. 準拠集団(reference group) [正解] a.

[解説] 準拠集団(reference group)とは、個人がその集団の規範を自分の態度・判断・行動の基準として採用している集団のことである。ただし、準拠集団は自分が現実に所属している集団であることが多いが、所属したいと憧れる集団や架空の集団である場合もある。個人が現に所属している集団の規範よりも、その人が所属したいと望んでいる集団の規範に同調しはじめることを「社会化の先取り」という。

3. 同調(conformity) [正解] b.

[解説] 集団の中での多数派は、多数であることによって他のメンバーの意見、態度、行動を規範の方向に斉一的に向わせる影響力を行使する(斉一性への圧力; pressure to uniformity)。この影響力によって個々のメンバーの意見、態度、行動が多数派のそれに近い方向に変容を被ることを一般的に同調(conformity)といい、このような影響のもとに生じる行動を同調行動(conforming behavior)という。

4. 規範的影響(normative social influence) [正解] a.

[解説] 規範的影響(normative social influence)とは、集団内の成員が互いに及ぼしあう影響のひとつである。規範的影響は、集団規範による社会的影響であり、社会的に何が「正しい」のかを示唆することによって、それに対する相手の同調を求めるような影響である。人は他者から好かれない(拒否されたくない)と思っており、そのため規範から逸脱しないように同調するようなときがこれにあたる。

5. 集団極性化(group polarization) [正解] a.

[解説] 集団極性化(group polarization)とは、集団意思決定では単独での（個人による）決定の場合に比べ、決定内容が極端な方向に傾くという現象である。これは集団討議を経ると、当初の意見が一層強められることを表しており、高リスクへの偏向をリスクシフト(risky shift)、低リスクへの偏向をコーシャスシフト(cautious shift)と呼ぶ。

6. PM理論(PM theory) [正解] C.

[解説] 三隅はリーダーの機能(リーダーシップ)をP機能とM機能に分類し、各機能の強さを測定することでリーダーシップと集団の目標達成の関連を検討した。結果、P機能もM機能も高いリーダーがどのような集団でも高い成果を残すこと、P機能の高さは短期的な課題達成に寄与すること、M機能の高さは集団凝集性の高さと長期的な課題達成に寄与すること、などが明らかにされている。

7. 傍観者効果(bystander effect) [正解] d.

[解説] ダーリーとラタネ(Darley, J.W. & Latan, B.)は、他に多くの人がいることで援助行動が抑制されることを傍観者効果(bystander effect)と名づけた。傍観者効果の要因として、自分以外の目撃者が行動を起こさないことによって緊迫度を過小評価する多元的無知(pluralistic ignorance)や、援助に対する責任感・不介入の叱責の可能性が分散してしまう責任の分散(diffusion of responsibility)、他者と異なる行動を起こすことに対して自己への評価が低下することを心配する評価懸念(evaluation apprehension)などが挙げられる。

8. 社会的促進(social facilitation) [正解] d.

[解説] 共行動者や観察者が存在することにより、個人の遂行成績や効率が向上する現象である。ザイアンスの動因理論による説明が有名で、他者存在による覚醒水準の上昇が個人の優勢反応を強め、習熟し効率よく行動できる課題はより効率的に遂行できるため、成績の向上が見られるという。逆に、もともと失敗しやすい未習熟の課題ではエラーがますます増えるため、成績の低下が生じる。これが社会的抑制(social inhibition)である。

9. 服従(obedience) [正解] d.

[解説] ミルグラムの実験では事前の合意として「実験を中断しても構わない」「中断しても報酬は全額支払われる」「中断したことによる損害は請求しない」など、指示に従わずに実験を中断することを阻害する要素は取り除かれている。それにもかかわらず服従が強くなったのは、研究者の正当勢力を認め、それに従うことが自身の役割であると認識したためと考えられる。

10. 研究倫理(research ethics) [正解] b.

[解説] 被験者が実験で使用する刺激の詳細を知ってしまうと、自然な反応が現れなくなるため、基本的な考え方として、実験内容の漏えいは回避することが望ましい。しかし、ミルグラムの服従実験に見られるような、被験者に極度の負担を強いる刺激の使用は倫理的に望ましくなく、現代においては、実験デザインについて事前に第三者による審査を受けることが必須である。その審査を担う倫理委員会のメンバーは実験の内容を事細かに知ることになるため、研究内容を把握しているのは研究者だけではない。